

# 彩の歳時記

令和元年 十一月

たけくらべ  
廻れば大門の見返り柳  
いと長けれど、  
お齒ぐる溝に燵火うつる  
三階の騒ぎも手に取る如く  
明けくれなしの車の行來に  
はかり知られぬ全盛を  
うらなひて

平成十六年【2004】十一月一日に発行された五千円紙幣の肖像に、近代女性として初めて採り上げられた「樋口一葉」は近代初の女性職業作家。吉原遊郭の情景描写で始まる代表作『たけくらべ』は、森鷗外や幸田露伴に「まことの詩人」「いささかの傷もない」と絶賛された明治20年(晩年)の名作。「たけくらべ」は「背比べ(丈比べ)」の意。子どもが互いに背伸びをしあいながら大人になっていく情景を切ない初恋を絡ませ描いた作品。舞台となる「酉の市」は江戸時代から続く新年を迎える「年中行事」、多くの大災害に見舞われた「令和元年」を静かに送り、新しい年の息災を願う人々で今年の「酉の市」も賑わいそうです。



錦木清芳画  
樋口一葉

## 十一月の暦

霜月 「霜が降る月」の意味

一日 炉開き 旧暦の十月の亥の日、茶道では風炉(ふろ)を閉じ、炉(ろ)を開く。現在は新暦十一月朔日が多い。江戸の武家屋敷や町屋などで炬燵を出すので「炬燵開き」とも。



三日 文化の日 戦前の明治節(明治天皇の誕生日)と1946年の日本国憲法公布、48年の施行日を合わせて国民の祝日に。皇居で文化勲章の授与式が行われ前後日に文化庁主催の芸術祭が開催される。

四日 振替休日

八日 立冬【二十四節気】この日より立春の前日(節分)までが暦上の冬。朝夕冷えこみ、日中の陽射しも弱まって来て、冬が近いことを感じさせる。



八日 酉の市 「一の酉」大鳥神社など鷺や鳥に因む寺社で酉の日に行われる年中行事。浅草の鳳神社が有名なものは、江戸時代に吉原遊郭が控えていたことによる。春をまつことのはじめや酉の市 宝井其角



十日 天皇即位パレード 颯風の影響で10月22日がこの日に延期に。

十五日 七五三 江戸時代、三代將軍家光の子、徳松(後の五代將軍綱吉)が病弱であったことから無事成長祈願のために(1650)年のこの日、袴着の儀式を行った事に由来。



十五日 きもの日 全日本きもの振興会が、きもの良さを知ってもらうため、七五三で和服を着る機会が増えるこの日に制定。

二十日 二の酉 熊手御守「かっこめ」は福を「かっこむ」「とりこむ」などの縁起物。

二十二日 小雪【二十四節気】 木々の葉は落ち、平地にも初雪が舞い始める。



二十三日 勤労感謝の日 国民の祝日 元は、作物の収穫に感謝する新嘗祭(にいなめさい)。

一葉忌 樋口一葉【1872~1896】の忌日。近代女流作家の嚆矢。「たけくらべ」の十四段「此年三の酉まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく・乱れ入る若人達の勢ひとては、天柱くだけ・」に当日の酉の市の賑わいが描かれている。台東区竜泉の「一葉記念館」でイベント開催。

## 十一月の歌

たきび 詞 巽聖歌【1905~1973】 曲 渡辺茂【1912~2002】

1941年(昭和16年)にラジオ番組「幼児の時間」で発表。1949年(昭和24年)にも「うたのおばさん」で松田トシや安西愛子が歌い、大衆に広まった。日本の歌百選。歌詞の「落葉焚き」や「山茶花の垣根」など、都会ではほぼ目にする事なくなつた。山茶花、ツバキ科の常緑樹で花の少ない晩秋から冬に赤く咲くため、古くから庭木や垣根に多用。初冬から12月に降る雨は、春の菜種梅雨に対して、山茶花梅雨と言ひ、冬に繋がる雨。



たきび  
かきねの垣根のまがりかど  
たきびだ焚火だ落葉たき  
あたろうか  
あたろうか  
北風ひいふう吹いている  
ささんか山茶花さいた道  
たきびだ焚火だ落葉たき  
あたろうか  
あたろうか  
霜やけおててがもうかゆい  
こがらし木枯しさいわい道  
たきびだ焚火だ落葉たき  
あたろうか  
あたろうか  
楓葉しながら歩いてく